

主催：早稲田大学 大学院政治学研究科 協力：名古屋大学

早稲田大学集中公開講座開催案内

in 東海

MAJESTY's BOOT CAMP

科学技術ジャーナリズムを考える2日間

この春、早稲田大学大学院政治学研究科 科学技術ジャーナリスト養成プログラム（略称：MAJESTY）の授業を東海地区にて公開し、集中公開講座「MAJESTY's BOOT CAMP」を開催いたします。科学技術ジャーナリズムや科学技術コミュニケーションに関心がおありの方は、ぜひご参加ください。

場所 名古屋大学理学部B館 116号室 (愛知県名古屋市千種区不老町)

日時 2009.2.10 (火) 17:00-20:30
2.11 (水) 9:00-18:30
(祝)

応募要領

応募方法	2008.12.22 (月) 下記Webサイトにて募集を開始します www.waseda-majesty.jp/events/
募集人数	20名程度
受講料	無料
講義内容	ジャーナリズム論の基礎的講義に加えて、科学技術報道や、広く科学技術にかかわる社会的問題等をケーススタディーとしてとりあげ、講義を行います。
注意事項	原則として、全講義に出席できる方を優先します。 詳しくはWebサイトのメールフォームから事務局へお問い合わせください。

2.10 (火) 講義内容

17:00 - 17:10 **開催の挨拶**

17:10 -18:40 **「メディア・モーダルシフトの行方を探る」**



小林 宏一
早稲田大学
政治経済学術院
教授

トラック便を主体とする既存物流系の一部を鉄道・船舶等の大量輸送手段に切り替える試みとしての「モーダルシフト」は、近年、運送業界において広まる気配をみせているが、「放送と通信の融合」が語られ、20世紀型マスメディアの凋落が加速度的に進行しつつあるメディア界もまた、今日、いまひとつのモーダルシフト期を迎えているかにみえる。こうした認識をもとに、本講では、メディア領域全体さらにはジャーナリズム領域で生起しているこの構造変動の実態と今後の行方について考える。

19:00 - 20:30 **「近代ジャーナリズムとその変容:現代ジャーナリズムが問われるもの」**



谷藤 悦史
早稲田大学
政治経済学術院
教授

近代ジャーナリズムの形成から論を解き明かし、第1世代ジャーナリズムの思想的背景、その論理を明らかにする。次に、19世紀における近代ジャーナリズムの変容過程をたどり、第2世代ジャーナリズムの特性を明らかにする。19世紀後半から20世紀を経て登場した第3世代ジャーナリズム、まさに現代ジャーナリズムの論理を明らかにし、現代ジャーナリズムの課題を総合的に検討する。最後には、現代ジャーナリズムの課題を指摘し、将来を展望する。現代ジャーナリズムを歴史の中に位置づけ、その特性を描き出し、将来を展望する試みである。ジャーナリズム関心を寄せる初心者、中級者を対象とする。

2.11 (水・祝) 講義内容

9:00-9:30 **ガイダンス**

9:30-11:30 **「編集の力を知ろう」**



青山 聖子
サイエンスライター
早稲田大学
政治経済学術院
客員教授

情報は媒体によって流通する。「編集」とは、どのような情報をどのような形で媒体にのせるかを、関係者と調整しながら決定していく仕事である。編集の仕方により、情報は伝わりやすくなれば、伝わりにくくなる。また、情報の性格も変わってくる。しかし、編集という仕事は目に見えにくく、情報の受け手がその存在を意識することはあまりない。この講義では、健康食品の広告を題材に、科学技術情報の編集について学ぶ。受講生には事前に課題を課し、その作成と互いの批評を通して編集について考えてもらう。

休憩後12:45からの講義へつづきます

2.11 (水・祝) 講義内容 (つづき)

12:45-14:15

「地球規模感染症の現代的意味ーエイズ・新型インフルエンザー」



若杉なおみ
早稲田大学
政治経済学術院
教授

生命科学・医学・医療を、ミクロ (DNA・遺伝子) からマクロ (公衆衛生) まで見通しながら学ぶことを目的とした私の講義の一部として、地球規模感染症を取り上げます。感染症は人々の間で伝播するために、さまざまな病気の中でも特に社会との接点が大きく、政治経済文化や人間の意識と強く関連し、その予防や対策をはじめ感染症のゆくえを決めるのは社会であるといっても過言ではありません。国境をたやすく越える病原体、温暖化・気候変動に起因する感染症の再興、人口増加や貧困による感染症の蔓延、「人間の安全保障」の重要項目としての感染症対策など、感染症は旧来の古典的な様相から、現代的な「新感染症時代」へと大きく変化してきており、メディアがそれをどのように把握しいかに伝えるのがますます重要になってきました。

14:30 -16:00

「マスメディアと医療との齟齬、なぜ起きる～メディア側の事情」



川口 恭
ロハス・メディア
代表取締役

医療とマスメディアは、とかく相性が悪いと言われる。メディア側なりに原因を考察したうえで、齟齬を和らげる一手段として、医療者と患者の懸け橋をめざす月刊『ロハス・メディカル』誌を創刊した。正確な情報を伝えるメディアがあれば、状況は改善すると見た。創刊から3年もってメディアとしては定着・成功した。しかし最近、今のロハス誌だけでは状況が改善しないと感じる。まだ何かが足りないようだ。そしてロハス誌の直面している課題と全く同じ理由で、マスメディアは医療と齟齬を来たすように振る舞わざるを得ないのだ、とも考えるようになった。何だか振り出しに戻ってしまったようだが進歩もあると思う。一連の経過と今後を解説したい。

16:30-18:30

「ナノテク報道を考える」



篠原久典
名古屋大学
大学院理学研究科
物質理学専攻
教授

新聞の科学記事は、記者が研究者に取材したうえで書かれる。では、新聞記者と研究者は、日頃どんなやり取りをしているのだろうか。できあがった記事は、両者にとってどんな意味を持つのだろうか。相手に対して思うこと、記事が紙面に載って変わったこと、また広く社会に与える影響についてもふれる。

カーボンナノチューブの研究を行う篠原教授は、新聞記者にどのように対応しているか、また、ナノテクに関するマスコミ報道が研究者や社会に与える影響について語る。広瀬記者は、研究者に取材する際に報道側はどのような姿勢で臨んでいるか、新聞社の事情を踏まえつつ語る。それぞれ講演を行い、その後、受講生も交えて科学報道について語り合う。



広瀬和実
中日新聞社会部
記者